

臨床倫理学応用コース 2023 実施報告

京都大学大学院文学研究科応用哲学・倫理学教育研究センター（CAPE）及び京大オリジナル（株）主催による、臨床倫理学に関する教育プログラム（臨床倫理学入門コース）を2024年2月19日と3月20日に開催しました。応用コースの実施は4回目で、参加者は全国から45名の受講生と、ファシリテーターと講師12名、京大オリジナルから事務局2名で実施しました。

1日目はオンライン形式で事例を紹介した後に小グループで意見交換をし、その後3週間の間にオンデマンドによる動画視聴をしてもらい、2日目は、対面とオンラインのハイブリッド形式でライブ授業を実施しました。

臨床倫理学コースの目的は、臨床で難しい事例に遭遇した人（臨床倫理コンサルテーションを担当する人や、問題を解決しようとする人）が、課題を適切に考えて対応できる技能を身につけ、現場で活動してもらうことです。課題の解決には、どこにどんな問題があり、その要因は何かを探り、患者はどうあることがよいかを考え、それを実現するのに必要な方策は何か、方策を達成するための戦術・技術は何かを考えることが必要ですので、これらを講義や演習を通じて学べるように構成しています。

応用コースの受講生は、基本的な考え方やコミュニケーションのスキルは身につけていることを前提としていますので、現場で患者を担当している人達が問題を考えるように具体的な助言をしたり、介入したりできるようになるところまでを求めています。したがって、まず自分で患者のありようを判断し、患者や患者に関係する人（ステークホルダー）との対話を通じて、人と人の間にあるさまざまな問題を解決するための方途を探る必要があります。自らの頭と身体を使って新たな関係性や対話の場を作ったりしないと解決できない事例を採り上げることにしました。

1つ目の事例は、糖尿病性腎症で維持透析を受けている女性が、透析を中止したいと言い、透析センターの医療者が対応に悩むという事例で、患者にどう対応するか、そして、倫理的に考えるスキルやコミュニケーションスキルを持たない現場のスタッフにどのような助言をするのがポイントです。各班では、患者の価値観を把握したり、医療者が患者との関係を構築できるように働きかけるなど、患者や医療者の苦しみを共有して対応する方針を立てており、患者だけでなく医療者も援助しようという気持ちが伝わってきました。

2つ目の事例は、大動脈置換術を受けた女性が合併症で死亡し、家族が、手術の説明が不十分で本人がリスクや必要性を理解して同意していたわけではないことを問題視した事例です。「患者には簡単な説明をして、あとは医者に任せてもらうのがよい」という独自のスタイルを長年行ってきた教授にどう対応するのかがポイントで、「患者には十分説明して同意を得ること」という原則に基づいた助言をただけでは解決しません。教授にどのような話をするかというところまで言及した班は多くはなかったですが、個人攻撃は避けて組織全体の問題として対応するなど、権力構造のある中で病院全体のパフォーマンスを上げるためのあれこれを検討していただけた点は素晴らしかったと思います。

いずれも原理原則に基づいた一般的な解釈を現場に返しただけでは解決に至らず、「治療中止を求めている立山さん」はどうあるのがよいか、「上級医と患者の間に挟まっている病棟医長」をどう援助するかなど、個々人の気持ちや状況を考えて対応しなくてはならない事例でしたが、受講生からは「4原則などのツールやガイドラインでは歯が立たない、しかもありふれた現場の問題を考えることができてよかった」といったコメントを頂戴して、合理的な考え方だけでなく情緒的な知性を働かせることの大事さを実感していただけたように思います。

臨床倫理コンサルテーションには診療報酬などの経済的裏付けがなく（これはどうにかすべき問題ですね）、すべて持ち出しとなりますが、やる気や余裕があったらやればよいというものではなく、適切な医療を提供するためには必須の活動だと思えます。このセミナー自体も草の根活動に近いですが、セミナーの2日目は休日であったにもかかわらず、多くの方が参加されて朝から晩まで熱心に議論する姿は、心強くもあり、楽しくもありました。臨床倫理の問題解決の道筋は、お互いの顔が見え、息づかいが感じられる関係の中で、苦しみを共有して和らげようとする試みから導かれることをあらためて認識しましたし、みなさんがそれぞれの現場で実践することで風通しがよくなり快適さも増すのではと期待しております。

今回は、最後の30分で各班での振り返りを行う時間を初めて持ちました。学んだことや、もっと学びたいことなどについて、多くのインプットをいただきましたので、新たなプログラムや工夫を考えたいと思います。本コースの受講生が数年前に立ち上げた「りんこん研究会」が臨床倫理コンサルタントを支援すべく活動しておりますので、ご関心のある方はご参加いただければ幸いです。また、本コースの経験をもとに「京大式臨床倫理のトリセツ」という書籍を金芳堂より出版しましたので、お求めいただければありがたく存じます（ニギニギ）。

ハイブリッドでのコース実施は3回目でしたが、つつがなく実施することができ、参加してくださった受講生のみなさま、講師やファシリテーターのみなさま、そして、準備から運営まで細やかな気遣いをしてくださった京大オリジナルのみなさまのおかげと存じます。心より御礼申し上げます。

2024年4月2日

佐藤 恵子